氏　　名　山本淳子（やまもとじゅんこ）
学位（専攻分野）　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第70号
学位授与の日付　平成11年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科　文化・地域環境学専攻
学位論文題目　『紫式部集』の研究

論文調査委員　（主査）教授　薗田　稔　教授　内田賢徳　助教授　島崎　健

論文内容の要旨

本論文は紫式部自撰とされる私家集『紫式部集』についての研究である。全体は大きく二編から成り，第一編は本家集の全体が，本文批判，配列や構成の論理と構造，作品主題等を通して論じられ，第二編は個別の歌或いは歌群について種々の新しい解釈が展開されている。

第一編は作品の全体論である。

第一章では，本家集の歌々が時系列などの客観的方法によって配列されているのではなく，「家集内物語」とでもいうべき幾つかのストーリーが織りなすように配列された文脈秩序をもっており，方法的に「物語」を志向するものであることが論じられ，それは特に家集前半部に顕著であると指摘される。

第二章では，錯簡が推測されている家集後半部について，前章で指摘された文脈秩序を以て錯簡箇所の推定・修復の試みがなされ，結果として従来の推測説が編集方法の面から補強されている。

第三・四章では，第二章の本文批判の上に立って，家集後半部の構造が考察される。そこに宮仕え関係歌と私生活歌が数首ずつ交互に現れるという特徴から，一見無秩序な列びにもみえる後半部が，宮仕えと私生活が相絡んだ作者の心の三様，即ち「身の不如意を嘆く心」「身に従う心」「身に適わぬ心」という三つの心情をそれぞれ複数のエピソード群によって描く配列がされていること，換言すれば自分の心を凝視して三様の心を発見した作者が，体験を三種に類纂して示す構造をもつことが指摘される。

以上を受けて第五章では，『紫式部集』の主題を作者の心の展開に捉え，前半の成長段階ではその変化，即ち「世を知らぬ無垢平穏な心」「世に直面し自己を開く心」「不如意な世を知る心」という変化を描き，後半の成熟段階では，上述の三態の如き多面的な心の諸相を描くという，作品全体を通じて「作者自身の心の成長・変容・諸相をみつめる」という主題をもつものであり，その主題に従って，前半は物語的方法が，後半は自己分析的方法がとられていると論じられる。

本論文の後半第二編は，個別の歌或いは歌群についての表現論である。

第一章では，家集前半にある父の越前守赴任に関わる五首の旅詠について，旅程の順からみれば混乱ないし無秩序な配列とも問題視されてきたこの歌群を，第一編で論じられた心についての主題から見直し，故郷への懐旧から新世界への期待に至る心理変化の順に整然と配列されているという，まさに「心の旅」であることが指摘された上で，旅の先蹤『土佐日記』の影響が考えられている。

第二章は，作者の結婚に関わるとみなされている桃花を歌材とする歌について，漢文の影響下に培われた伝統的な桃花認識を祝婚の場に生かしたものであることが指摘され，更に漢学者を父にもつ作者に於ける『白氏文集』一編の受容が考えら

れている。

第三章では，紫式部歌の中で最も取り上げられ論じられることの多い，かつ最も難解である，「身」と「心」を詠んだ連作について，それが作者の中に深く住む白居易という詩人の「身」「心」認識の直接的な影響の下に詠まれたとの推定がなされている。

第四章では，父の赴任先である越前関係の歌について，作者の都鄙に寄せる思いが時と場によって使い分けられている様を見，そこに作者独特の思惟形式の一典型が見られるとする。

第五章は家集巻末に置かれた贈答歌についての論で，それが作品全体を総括する意味・仕掛けが指摘され，家集の配列が極めて意図的な構造をもつという申請者の考えが補強されるとともに，『紫式部集』という一つの自撰家集の編集のあり方を，広く平安時代私家集史へ位置づける展望がなされている。

以上，第一編の全体方法論は第二編の個別読解の基礎となり，また同時に第二編の個別表現論が第一編の構造論・主題論の基礎ともなっており，全体として申請者の『紫式部集』理解が一応の集大成をみている。

論文審査の結果の要旨

まず「序」に於て申請者は『紫式部集』の研究史を詳細にたどっており，先行文献を正確にかつ批判的に踏まえて，研究対象に対する問題意識は極めて明確である。

第一編の全体論について。従来，本家集の配列は概ね時間軸に沿っている，即ち詠まれた時期の順に凡そ配列されているらしいと考えられてきたが，そう見ると細部に於て不徹底或いは矛盾と思われる箇所に出会う。これを説明するために，例えば冒頭歌の日付に関して，本家集の現存伝本総てが一致するという文献的事実にも拘らず，こぞって誤写説により合理的に改変するのが現状であるが，これに対して申請者は文献事実のままに理解しようとし，本家集が従来言われてきたような客観的な時間軸に沿って配列されているのではなくて，いわば「物語的時間」という軸に沿ったものであることを指摘する。この考え方によれば上記の問題はあざやかに解決される。歌々の配列は極めて緊密で，あたかも物語を読むが如く，一つの歌は前後の歌と親しく関わり合い，更には離れて置かれた歌々と遠く響き合う，といった極めて魅力的な読解が展開されており，まずは本家集の前半部を初めて新しい視点から見直した斬新な「読み」が示されたと認められる。

客観的な時間軸からみての不徹底或いは矛盾を説明する今一つの方法として，従来から家集後半部に錯簡が想定されてきたが，これはあくまで推測の域を出るものではない。仮に錯簡を想定して修復を加えた場合，作者の意図と創意から離れた別の配列をもった『紫式部集』を作るという結果にもなりかねない。申請者は，見出した本家集独自の方法からこの問題を見直し，結果的には従来の推測説を概ね追認することになるが，文献的には立証の困難な，しかしながら本家集にとっての大問題を，その新しい「読み」によってほぼ解決し得たと認められる。

その本文批判の上に立って，家集後半部の配列構造が分析される。結果はやや複雑で，少なくとも前半部の如くにはあざやかではない感があるが，それは申請者が言うように「構造の難解さは，編集の論理が『心』という余りに主観的かつ主情的なものに拠るため」であろうか。そもそも配列構造論というものは，従来からどの作品のどの説についても多かれ少なかれ主観的延いては恣意的という批判を受けやすいものであることを考えれば，未定稿とも云われる後半部を前半部と統一的にかくまで整合的に分析してみせた力量は，まずは見事といえよう。方法について前半部を「物語的」と言い，後半部を「分析的」と言う規定の不均衡にはなお後考の余地があろうが，基本的には説得力のある優れた先駆的な成果と認められよう。

第二編には個別の歌或いは歌群についての新しい解釈五編が収められているが，それぞれに重要な又貴重な指摘がなされている。

第一章は，従来様々に論じられながら依然として定解を見ない旅詠五首についてであるが，第一編に論じられた本家集の論理構造・主題論に沿って説かれる「心の旅」という解釈には，積年の疑問が実にあざやかに解かれた感がある。

第二・三章は漢文漢詩，特に白詩受容について，従来言われているよりはるかに深い関係が指摘されている。『紫式部日記』から窺われるように，漢学者を父にもつ作者は漢籍の優れた理解者と思われるが，同日記の中のあからさまな清少納言

批判にみられる如く，その漢籍素養を決してひけらかそうとはしない姿勢をとる。その作者の和歌に自ずと沁み込んでいるかの如き漢詩の影響を，丁寧に慎重に探り出す。その影響関係の直接さの如何についてはなお疑問も残ろうが，それは影響出典関係という問題が本質的に孕むものでもあろう。むしろこの指摘によって，本家集中で最も言及されることの多く，かつ最も難解とされる「身」と「心」の連作歌に新たに説得力のある解釈が示された点が重要であり，かつ第一編の全体論に於ける配列構造論・主題論の中心部に位置づけて読み直される時，この新解釈は極めて魅力的である。そして第五章に至って巻末歌が本家集全体を総括するという解釈・位置づけは，本論文そのものの見事な総括でもある。

なお第四章の越前関係の歌についての小さな論文は，京と越前双方の暮らしを経験した作者と同様，北陸に育ち京に学んで双方を知る論者にして初めて鮮明に指摘し得る佳編であろう。

以上，本論文は，部分的でしかなかった先行の研究を凌駕する，『紫式部集』についての本格的研究の優れた嚆矢といえよう。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成11年１月28日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。